

Title	<書評>Wagemakers, Joas. A Quietist Jihadi: The Ideology and Influence of Abu Muhammad. Cambridge University Press, xxiii+290pp.
Author(s)	池端, 蒔子
Citation	イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (2015), 8: 398-400
Issue Date	2015-03-16
URL	https://doi.org/10.14989/198329
Right	©京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属 イスラーム地域研究センター 2015
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Wagemakers, Joas. 2012. *A Quietist Jihadi: The Ideology and Influence of Abu Muhammad*. Cambridge University Press, xxiii+290pp.

9.11以降、イスラーム過激派の動向や国際政治における反テロ戦争がしばしば議論的となってきた。その場合にイスラーム武装闘争派を「ジハード主義」として一括し、武力の行使やテロの側面によって一般化がなされることが多い。言うまでもなく、ジハードは伝統的なイスラーム思想においても大きな意味を持っており、現代のジハード主義がそれとは異なる新しい意義を持っているとすれば、安易な単純化をすることなく、その思想史的な意義を厳密に考察する必要がある。そのような観点から、国際的には無名の、しかし中東では大きな影響力を持つ思想家を取り上げた本書が注目に値する。

本書が対象としているアブー・ムハンマド・マクディスイー (Abū Muḥammad al-Maqdisī) は、1959年にヨルダン川西岸地区に生まれたヨルダン人の思想家である。これまで彼にはあまり光が当てられてこなかったが、現在最も注目すべき急進的イスラーム思想家の一人である。彼のサラフィー主義的思想は、広範にイスラーム過激派に影響を与え、ウサーマ・ビン・ラーディンの後継者で中央アルカイダの指導者であるアイマン・ザワーヒリーや、イラクにおけるアルカイダのかつての指導者アブー・ムスアブ・ザルカーウィーにも影響を与えてきた。ザルカーウィーは「イラクとシャームにおけるイスラーム国 (ISIS)」の前身である「タウヒードとジハード集団」の創設者であり、ISISは2014年にシリアとイラクの一部を支配下に置いて「イスラーム国」の樹立を宣言した。ザルカーウィーの師であったというだけでも、マクディスイーの思想を研究することの重要性が判然とする。しかし、彼の思想的影響力はそれにとどまるものではない。そのような思想家を包括的に理解するための、本書は初の試みである。

サラフィー主義はこれまで、信条は同一であるが方法論において異なる三種類の思潮に分けて説明されてきた。それぞれ、政治や暴力とは距離を置き、ダアワ(教宣)と説教を重んじる静寂主義者 (Quietists)、党派形成などの政治参加を行う政治派 (Politicos)、政権を不信仰として打倒しようとし、時に暴力を伴うジハード主義者 (Jihadis) である。しかし、本書の著者はこれらの三種類には、その特徴において横断性があると同時に、信条においても詳細に見れば相違があると主張する。著者によれば、マクディスイーはこのうち第三のジハード主義者に属するが、ダアワを重視するなど信条においても方法論においても静寂主義者に近い。よって、マクディスイーを「静寂主義的なサラフィー・ジハード主義者 (Quietist Jihadi-Salafi)」と特徴づけて説明する。著者であるヨアス・ワーヘマーケルスは、オランダのラドバウド大学ナイメーヘン校において博士号を取得した新進気鋭の研究者で、現在は同大学の助教授として、現代中東におけるイスラーム運動、特にヨルダン、パレスティナ、サウジアラビアにおけるイスラーム主義、サラフィー主義について研究を行っている。

本書は4部、9章から構成されており、第1部の1章から3章ではマクディスイーの生涯と彼の信条、方法論について説明し、第2部の4章と5章ではマクディスイーがアラビア半島に及ぼした影響について述べている。第3部の6章と7章では、「ワラー・ワ・バラ」 (al-walā' wa-l-barā', 忠誠と否認) という概念の発展におけるマクディスイーの影響について取り上げ、第4部の8章と9章ではマクディスイーのヨルダンにおける影響について述べられている。以下、各章を概観していく。

第1章では、マクディスイーの生涯について、1959年の彼の誕生から2009年までの半世紀を概

説することで、彼の思想の背景が描かれる。西岸地区に生まれた彼は青年期に訪れたサウディアラビアにおいてワッハーブ主義の影響を受け、サラフィー主義者となった。そして彼はザルカーウィーを弟子に迎えるが、後にジハードの実践をめぐる意見の違え、関係性が悪化するに至った。

第2章では、マクディスイーの「静寂主義的なサラフィー・ジハード主義者」としての信条、特にジハードの捉え方について述べられている。ジハードについて、古典的ジハード、ムスリム支配者へのジハード、グローバル・ジハードの三種類について概説し、それぞれに対するマクディスイーの立場を考察している。ジハードという言葉は文脈によって様々に意味を変えるが、ここで語られる古典的ジハードとは、非ムスリムの侵入者に対し武力をもって戦うことである。この考えが発展し、特にサラフィー主義に特徴的なタクフィール(不信仰断罪)という概念に立脚して、ムスリム支配者の打倒を目指すジハードが生まれる。マクディスイーが自らの著作の中で重視するのはこのムスリム支配者に対するジハードである。それに対して、ウサーマ・ビン・ラーディンやアイマン・ザワーヒリーが作り出したグローバル・ジハードの流れについては、マクディスイーは支持を表明しながらも、ほとんど言及することはない。あくまでも彼がジハードの対象として強調するのは、イスラーム世界内部において支配を行う不信仰なムスリム支配者である。

第3章では、「静寂主義的なサラフィー・ジハード主義者」としてのマクディスイーの方法論について検討されている。マクディスイーは、ムスリム支配者へのジハードを支持する点で紛れもなく「サラフィー・ジハード主義者」であるが、他の思想家と比較すると、ダアワをも重視する点、見境なく無差別に暴力を行使すべきでないことを強調する点で静寂主義的である。本章ではこのような彼の特徴を検証している。

第4、5章では、マクディスイーとサウディアラビアとの関係について考察がなされる。サウディアラビアにおけるワッハーブ主義の伝統は、主に静寂主義者たちによって受容されているが、マクディスイーはそれをジハードという目的のために活用した点で静寂主義的でありながらもサラフィー・ジハード主義たりえている。彼は、湾岸戦争時に国土防衛のため米軍を国土に配備したサウディアラビアをクフル(不信仰)の国とみなして批判を行い、サウディアラビアの体制に対するジハードを主張した。こうした思想は「アラビア半島のアルカイダ」に受け継がれている。マクディスイーによるサウディアラビア体制打倒の主張は、多くの穏健派には受け入れられなかったが、急進派には影響を与えたのである。

第6、7章では、「ワラー・ワ・バラ」 という概念をマクディスイーがいかに展開したかについて述べている。「ワラー」と「バラ」の語義は、それぞれ「忠誠」と「否認」を表す。これらの言葉が対になって、自らの属するグループへの忠誠と他者の否認という概念を表し、イスラーム初期にはムスリムが非ムスリムに対して、さらにハワーリジュ派やその分派のイバード派、シーア派が他派に対して用いた。そして、サラフィー主義においても、不信仰で逸脱した他者を退ける意味でこの概念が受容されることとなった。この概念のうちの一つの要素で「不信仰者の援助を求めること(al-isti'āna bi-l-kuffār)」をマクディスイーは強く非難した。これは具体的には、サウディアラビアが湾岸戦争時に国土の防衛を米軍に頼ったことから生じた問題である。このような概念の強調はワッハーブ主義に伝統的なものであり、彼はこれを現代的な文脈に適用した。言いかえると、彼はワッハーブ主義に基づいて成立したサウディアラビアを、ワッハーブ主義の伝統的な概念を用いて痛烈に批判したのである。このことは、サウディアラビアにおける思想状況に大きな影響を与えることとなった。

第8、9章では、マクディスイーのヨルダンにおける影響について述べられる。マクディスイー

は幼少期から中東各国を歴訪したが、その影響力が感じられるようになるのは1992年にヨルダンへ戻って以降である。そこでは、彼は政権打倒のジハードよりも、まずダアワ(教宣)を重視した。サウディアラビアでジハードを強調したのは、ワッハーブ主義に連なるサラフィー主義の伝統や下地があると同時に、サウディアラビアでは軍が比較的弱かったからである。それに対してヨルダンにおいては軍が比較的強く、まずはサラフィー主義の教えを浸透させることを優先させたため、このような変化が生じることとなった。そして1994年から5年間投獄された後、彼はヨルダン国家や穏健な静寂主義者と対抗するのみならず、過激なジハード主義者とも対抗する静寂主義的サラフィー・ジハード主義の立場を明確にするようになった。

本書は、ジハード主義という言葉が概して暴力的イメージを伴うと見る近年の傾向に反対して、ジハード主義が実際には布教による社会変革の側面を持っていることを、主要な思想家に焦点を当てることで説得的に論じている。この点で、現代中東の政治思想を理解するためには非常に意義深い著作であると言えよう。また、本書はアブー・ムハンマド・マクディスイーという一人の思想家について包括的に検証するのみならず、現代中東地域におけるサラフィー主義、ジハード主義についても広く概観する良書である。マクディスイー自身にインタビューを行うなどのフィールドワークによる成果も、本書の価値を高めている。

昨今スンナ派とシーア派の対立がしばしば話題にされるが、スンナ派の思想潮流を研究している評者の立場から見ると、スンナ派内部における対立も極めて重要な問題である。スンナ派内部における思想の違いは、急進派や穏健派、サラフィー主義、ジハード主義などによって様々に定義づけられるが、それらの思想の内的実情も多様であることを示した点において、本書の視座を高く評価したい。しかし、「静寂主義的サラフィー・ジハード主義」という区分けが、本当に的を射ているかどうかは、なお検討の余地がある。マクディスイーは過激なジハード主義者と対立すると同時に、ヨルダン国内の静寂主義とも対立している。著者の区分はそのような彼の立場を表すものであるが、複合語をこのように作る用語法は表現上の矛盾が大きすぎるように思われる。イスラーム復興が顕在化して以降、イスラーム思想は実に多様化しており、それぞれを的確に定義し、区分していく必要がある。この問題は、今後の中東政治思想研究における重要な課題の一つとなるだろう。

(池端 蒔子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Achcar, Gilbert. 2013. *The People Want: A Radical Exploration of the Arab Uprising*. Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press, xii+328pp.

「アラブの春」はチュニジアやエジプトにおける民主化革命の成功によって世界を驚かせ、民主化への気運と期待を内外にもたらした。しかし、始まって2年のうちにアラブにおける危機の様相があらわとなり、民主化どころか軍政の復活や多数の難民を生む内戦などの動乱が発生した。そのような中で「アラブの春」とは一体何なのか、その構造要因が何であったかの十分な究明は進んでこなかったが、ようやく根源的な要因を扱う研究が現れはじめた。本書はそのひとつであり、一貫したラジカルな視点を提供しているきわめて有効な研究書である。

本書は、「アラブの春」発生後すぐに始まった集中的な研究の成果がまとめられたものであり、著者が教鞭をとるロンドン大学のMENA地域開発問題講座を土台としている。MENAとはMiddle East